

鎮魂頌

折口 信夫 作詞

信時 潔 作曲

思ひみる人の はるけき
海 の 波 高くあがりて
た、なはる山も そ、れり
かそけくもなりにしかなや
海山のはたてに 淨く
天つ虹 橋立ちわたる
現し世の 數の 苦しみ
た、かひにますものあらめや
あはれ其も 夢と過ぎつ、
かそけくも なりにしかなや
今し 君 安らぎたまふ
とこしへの ゆたのいこひに
あはれ そこよしや
あはれ はれ さやけさや
神 生れたまへり
この國を やす國なすと
あはれ そこよしや
神こゝに 生れたまへり

作詞は民俗学者・国文学者である折口信夫博士で、博士の養子折口春洋もまた硫黄島で戦死され、英霊祭祀のあるべき姿と日本人の古来の道統の存続を説かれました。作曲は昭和三十四年靖國神社御創立九十周年を奉祝し、元東京音楽学校教授信時潔氏に委嘱されました。信時氏は「海ゆかば」などの名曲を数多く残されてをります。

御製 雪となり』

雪となり花とはなりて富山なる

競技場埋め人ら踊れり

天皇陛下におかせられましては平成十二年十月、第五十五回国民体育大会（富山国体）に御臨席遊ばされ、開会式の式典後に行はれた縣民の団体競技をご覧になられ、その様子をお詠みになられた御製に、富山交声合唱団で指揮者をされてゐる佐藤進様が、平成二十七年「全国豊かな海づくり大会（富山大会）」（御臨席の天皇皇后両陛下富山縣行幸啓奉迎に合せて謹作曲をされたのであります。

大勢の縣民による歡喜溢れるマステームの様子が表現されてをり、歌ひ出しは華やかな開会のファンファーレを、中盤では競技場の広々とした景觀を、後半からは付点のリズムとスタッカート短く切つて演奏する（で雰囲気も変り軽やかさと人々が踊つてゐる様子が表現されてをります。

秋篠宮殿下お歌 立山にて』

立山にて姿を見たる雷鳥の

穏やかな様に心和めり

秋篠宮文仁殿下には平成三年十月、富山縣に於いて開催された第三回日本自然保護會議に御出席に相成り、その折、立山の室堂方面をも訪ねられ、其處にて野生の雷鳥を御觀察遊ばされました。

殿下が野生の雷鳥を御覧になつたのはこれが最初であられた由ですが、雷鳥が人を怖がらない様子に甚（いた）く感銘をお受けになられ、お氣持も穏やかになられたさうです。そして、その折の思ひを國風（くにぶり）にお詠み遊ばされたのです。

平成二十五年の宮中歌会始の儀に際し、勅題「立」に因みこのお歌をお寄せになり、初めて國民の知るところとなり、分けても富山縣民は一入の喜びを覚えたのでした。御製「雪となり』と同じく、佐藤進様が謹作曲されました。